

ディケンズ批評 発展の時代

非凡な凡人  
ハンフリー・ハウスとディケンズ  
On Humphry House and Dickens

山本 史郎  
Shiro YAMAMOTO

1

本題に入る前に、まず、私にとって、ハンフリー・ハウスがどういう人なのかということをお話ししておかねばならない。といっても、大して深い縁があるわけではない。私をはじめてハウスを読んだのは、多分、今から四半世紀前の、23才の頃だろうと思う。そのときちゃんと読んだ証拠に、その本には、重要と思われたところにアンダーラインが引かれている。しかし、読んだとはいっても、ページをめくりながら、ある一定時間のあいだ本の上に頭をかざしていたという物理的な事実と、本当に理解したかどうかということは、別な問題である。今回、このシンポジウムのために再読してみて、このことが、あらためて実感された。というのは、過去の自分はずいぶん頓馬なところに線を引いているなあ、こんなところに注目していたのじゃあ、とても段落の趣旨なんか分かっちゃいないだろう・・・と感じられたし、過去の自分にむかってこの馬鹿やろうと罵りながら、しかし、おれも少しは進歩したのかなと、でれでれとにやけながら、今回読んだわけである。

2

さて、最近どのような言い方をされているのかは知らないが、当時、ハウスの *The Dickens World* はディケンズ研究を志す者にとっては必読書だと言われていた。同じようなステータスのものとして、いくつか例をあげれば、G.K.Chesteron や George Gissing のディケンズ論、George Orwell の評論、Edmund Wilson の *Two Scrooges* などがあったと思う。したがって、ハウスは、何としても読まなけ

ればならない本の一冊であった。

概して、これらはどれもそんなに難しいものではない。ところが、はじめて読んだとき、ハウスの本はとても難いと感じた。その理由は、いくつかあげることができる。

まず第一に、ハウスの文体が若々しい、ぴちぴちしたものだということがあげられる。たとえば、Chesteron や Gissing などは、ディケンズ論を書いたころにはすでに作家として多くの著作があり、善くも悪くも、文体がねれて、丸みがあるように思う。ところが、ハウスが *The Dickens World* を出版したのは1941年だが、そのとき、ハウスは弱冠32歳の若者だった。それ以前には Gerald Manley Hopkins についての著作があるばかりで、このように文筆家としての経験不足のためであろうか、時に、言葉の選択に若さがあったり、文章に表現された思考の流れにやや唐突なところがあったりするような気がする。しかし、これは、私の個人的な感想であり、私自身が英語の読み手としてはまだ駆け出しだった（いまでもそうだ）からにすぎないので、このように感じた（感じる）のかもかもしれない。

しかし、もっと本質的な意味で、ハウスの本を読みにくいものになっているものがある。それは、ディケンズばかりでなく、19世紀のその他の人々によって書かれた小説、ジャーナリズム、伝記などの文章がふんだんに引用されていることによる。こうした引用は、たいてい短く、文脈のないものがいきなり出てくるので、それらを読んで、まず、ハウスがそれらを引用しているポイントにまで内容を煮詰め、次に、その適不適まで判断しながら読み進めるのは、とても手間のかかることである。

このように、いわゆる一次資料が大量に含まれるという点で、ハウスの本は上に並べたその他の必読書と決定的に異なっているが、それに関連して、もう一つ言っておかなければならないことがある。それは、*The Dickens World* には、ディケンズが生きていたころの社会思想や文物や歴史、例えば、乱雑に列挙するなら、Young Englandism や Chartism、福音主義、ラファエル前派、鉄道、郵便馬車等々…のことがふんだんに出てくる。というか、それらについてある程度知っていることが前提されているので、ヴィクトリア朝についてこれから学ぼうという者にとって、ハウスとつき合うのはとても荷が重い。

以上、初学者にとってハウスは決して読みやすい本ではないという視点を借りながら、*The Dickens World* がどのような本であるのかを大まかにご紹介したつもりである。このように初学者には難しい本でありながら、これが必読書とされてきたのは、ディケンズについての本格的な実証的研究として、これが最初に出たものであるということに加えて、この中でハウスによって述べられているこ

とが、それまで、ばくぜんと考えられていたディケンズ像を大きく打ち破る革命的なものであり、それが今日でも真実の光を失っていないということが挙げられるだろう。これが、ハウスの本に与えられている、通常の歴史的評価だと思う。

## 3

さて、それでは、実際にハウスが何をどのように論じたかということに目を向けよう。まず、具体的に、どのような方法を用いたのか見よう。Chapter IV の“Economy: Domestic and Political (II)”と題された章の中に、*Oliver Twist* に触れている部分があるので、紹介してみよう。

イギリスではエリザベス朝のころに制定された the Poor Law によって、困窮民の救済が行われいたが、産業革命の進行とともに社会が大きく変わった結果、実状に合わなくなっていた。そこで、マルサスの人口論の考え方をもとにしている the New Poor Law が1834年に施行され、これを批判する意図で、ディケンズが1837年に *Oliver Twist* を執筆したわけである。このような事実を述べた上で、ハウスは、まず、当時の一人の人物が the New Poor Law の導入に対してどんな反応を示したかを紹介する。そして、Public School を改革したことで有名な、Dr. Arnold の手紙が引用される。

... I am very far, however, from wishing to return to the old system; but I think that the Poor Law should be accompanied by an organized system of Church charity, and also by some acts designed in title, as well as in substance, for the relief of the poor, and that by other means than driving them into economy by terror.

(p.93) (以下の引用はすべて、Humphry House, *The Dickens World* (Oxford, 1942) による。)

つまり、当時の一人のインテリが、まさにディケンズと同じような精神で、1834年の法律にたいして反応していることが示される。Dr. Arnold の手紙は、34年、36年、39年と、合わせて3通引用されている。

さて、このように、この法律はインテリの間で大きな疑問符とともに見られていたが、当然、労働者階級の人々の反発もはげしく、食事の少なさがその焦点の一つであったと述べられる。そうして、ハウスは、ディケンズが小説で描いたことを、事実とつき合わせる。

Dickens's 'three meals of thin gruel a day, with an onion twice a week, and half a roll on Sundays' was, of course, an exaggeration. But the No.1. Dietary approved and published by the Poor Law Commissioners in 1836 included 1 1/2 pints of gruel for every one of the seven days,

and the total food for able bodied men in the week was as follows:

On three days: 12 ozs, bread; 1 1/2 pints gruel; 5 ozs. cooked meat; 1/2 lb. potatoes; 1 1/2 pints broth.

On three other days: 12 ozs. bread; 1 1/2 pints gruel; 1 1/2 pints soup; 2 ozs. cheese.

On Friday: 12 ozs. bread; 1 1/2 pints gruel; 14 ozs. suet or rice pudding; 2 ozs. cheese.

(p.94)

このような食事の乏しさは、新救貧法を象徴するようなものになっているが、これについて、ハウスはディケンズが *Oliver Twist* で、具体的にどのような批判を行っているかということに話をうつす。すなわち、新救貧法には、院外給付の廃止、教区によって運営されていた Workhouse を、もっと大きな単位にまとめること、運営の組織を一新することなど、さまざまな改革が含まれていたが、ディケンズは、これらのことにはまったく触れない。

Leaving aside the doctrinaire of Malthusianism by which many of its promoters were influenced, the main practical aims of the new Poor Law were to reduce the cost of relief by joining parishes in unions and applying a uniform standard throughout the country. . . . With these aims no unprejudiced person who knew the facts could possibly quarrel. Dickens never mentions them, nor does he discuss the wisdom of the general policy of restricting, as far as possible, outdoor relief for the able-bodied: he concentrates mainly on the bad workhouse feeding, the absurdity of such officers as Bumble and the utter failure to make any proper provision for the pauper children. With these points in mind we can look at Harriet Martineau's criticism of him.

(pp.95-96)

つまり、ディケンズは、主として、食事の不足、運営者の問題、小どもの環境の悪さの3点のみを批判しているということ、ハウスははっきりさせる。そして、その上で、当時、Political Economy の啓蒙小説のようなものを書いていた、Harriet Martineau の Oliver 批判が紹介される。すなわち、ディケンズは改正された救貧法ではなく、古い救貧法を対象にしていると、Martineau は、述べているという。しかし、これに対して、ハウスは、食事の不足は新法になってからの問題であることを 1835年4月の *Quarterly Review* に掲載された論説を引用しながら説明し、さらに、子どもの環境が、新しい法律のもとでも改善されていないので、Martineau 女史のディケンズ批判が当を得ていないことを明らかにする。

あまり長くなると退屈なので、新救貧法にふれた部分についてはこの辺で切り上げるが、このように、ハウスは、詳しい歴史的知識を動員し、当時のさまざ

まの文献を渉獵しながら，ディケンズの作品を当時の社会の文脈にもどして，その意味づけや評価を行おうとしているさまが，お分かりになっていただけたのではなからうか。

## 4

では，このように綿密な社会史的な方法で，ハウスが全体としてディケンズについて何を述べているかということに移ろう．ハウスが述べていることを実際に引用しながら，ざっと眺めてみよう．

It is, of course, from Pickwick, and most of all from the coaching parts of it, that the popular idea of the Dickens 'period' is mainly derived; but the time-strands in the book are so various that the period they suggest is an imaginary one: retrospection and ante-dating combine to produce an amalgamation for which the supposed date is little more than a convenient label.

(p.27)

ディケンズの作品には，19世紀の歴史が正確に描かれているという俗信があるが，これに対して，ハウスはそうではないという．すなわち，ディケンズが子どもども時代から青年期初期をすごした20年代，30年代の記憶が，ディケンズの作品には繰り返し描かれるが，それらは必ずしも時間的に一貫しておらず，しかも，後期の作品になると，ディケンズが執筆しつつある現在，すなわち50，60年代が，20，30年代の背景に接ぎ木されているという．

He was often even rather behind his times. His popularity as a moralist was thus enhanced by his habitual retrospection: his ante-dated plots took some of the sting out of his satire for those who merely wanted entertainment, and encouraged the mild exercise of historical comparison for those who cared for profit and instruction.

(p.42)

ディケンズは，社会問題を先取りし，描き出したと一般には考えられているが，それは真実でなく，すでに古くなった問題を描くことも多く，むしろそれが，読者がディケンズに親しみをもてる要因となった．

Money is the instrument by which the villain thwarts the hero; and the two are chiefly distinguished by their attitudes towards it; their attitudes to women are secondary.

(p.58)

... he did not create misers of the sterile and passive kind, who love money merely for its own sake, and hoard their useless coin in chimneys and teapots. . . . This obsession with money's power goes to explain

Dickens's lasting interest in Debtors' Prisons. . . . It is certainly true that most of the experience, visual and emotional, on which Dickens's descriptions of debtors' prisons were based came directly from the time when his father was in the Marshalsea; it is true also that imprisonment for debt was an obvious target for destructive Benthamism; but still the pity for debtors is only the extreme instance, backed by the most authentic experience, of an attitude to money which is apparent in all his treatment of it. For money is an instrument of cruelty, and imprisonment is the most spectacular form of suffering it can inflict.

(p.60)

ディケンズの小説はどれをとっても金がテーマになっている。とくに、金を持った個人が、金を持たない個人に対して、どのような力を振るうことができるかということに、ディケンズの関心の中心があった。このような観点から見ると、債務者監獄にディケンズが強い興味をいだいていたことが、自然に説明できると、ハウスは述べるのである。つまり、金が人間に与える力を目に見えるものとも明らかなかたちで見せてくれるのが、債務者監獄だというわけである。

It is dangerous to be exact, but it is clear that in the 'forties a different type of person comes on the Dickens scene, and that the scene itself changes. There is a difference of atmosphere between *A Christmas Carol* (1843), which is a story of vague undated benevolence, and *The Chimes* (1844), which is a topical satire. *Martin Chuzzlewit* is uncertain ground; but it is safe to say that in *Dombey and Son* the new style is so far developed as to be unmistakable. The people, places, and things become 'modern'.

(p.136)

1840年代の中頃に断絶があり、それ以降は、ディケンズの描く人物、場所、モノが“modern”な印象になるという。そしてさらに、

These changes are clearly reflected in Dickens's work. With *Dombey and Son* the perpetual interest in money enters on a new phase. . . .

In the earlier novels finance is very individualistic; from *Dombey* onwards, though the interest in money's personal power still continues, and is indeed a main theme of *Great Expectations*, money as a system is even more important.

(p.165)

40年代後半から、投資や投機が社会を動かすようになってくるとともに、金は個人に権力を与えるものという視点に加えて、社会の仕組みそのものに組み込まれた、一つのシステムとして認識されるようになった。

A great deal has been written and said about Dickens as a writer for

‘the people’. Yet his chief public was among the middle and lower-middle classes, rather than among the proletarian mass. His mood and idiom were those of the class from which he came, and his morality threw upon class distinctions even when it claimed to supersede them. . . . It should hardly be necessary to stress the substantial truth of this judgement; but Dickens has so often been claimed as popular in other senses — by Chesterton as if he were the leader of a kind of peasants’ revolt in Bloomsbury; by Mr. Jackson as if his heart were really devoted to the uniting of the workers of the world — that some insistence on it here, in addition to what has already been implied in other chapters, must be forgiven.

(p.152)

ディケンズは「貧しい人々を擁護した作家」という俗なイメージ、あるいは階級を否定した急進的な作家というイメージが存在するが、中産階級の意識がとて強い作家であり、階級が存在をつねに前提としていた。

Dickens . . . was an exceedingly practical person, who thought in terms of money and getting things done: in other words, he was more concerned with administration than with politics proper.

(p.182)

ディケンズは実務家肌であり、法の遅滞、都市衛生の改善、行政の改革を主張したが、すべて、efficiency すなわち効率を主張したものだ。

. . . show well enough his inquisitively morbid interest in all forms of crime and death; but they show too a kind of clerical satisfaction in the functioning of a well-run organization.

(p.202)

ディケンズが警察を称賛したことも、efficiency を愛する性格から説明できる。

It is only in the ‘fifties that Dickens begins to make general attacks on the central administrative departments of Government; and in this, as in other things, he was following rather than leading public opinion.

(p.183)

しかも、ディケンズが言い出したことではなかったし、*Little Dorrit* でも行政の改革がある程度行われたあとで、前の制度について批判している。

The paragraph is extremely important and interesting, because in it Dickens accepts the fundamental ethical and political proposition of the political economy he generally so much deplors. The interests of employers and employed must be assumed to be identical or must be destroyed. The doctrine of the identity of interests was common to the utilitarians and the economists: on the question of theory there is no real difference between Dickens and W. R. Greg; he is not in the least a



Socialist.

(p.208)

ディケンズはいわゆる Political Economy を目のかたきにしていたと思われるが、ディケンズは、資本家と労働者の利益は一致するという Political Economy の大前提を受け入れていた。

## 5

ここまで、*The Dickens World* という本の中でハウスが述べていることの一部を抜きだしたわけだが、これらから何が言えるだろう？

まず、注目しなければならないのは、ハウスが1940年ごろに主流であったディケンズ像やディケンズ研究にたいして、強烈なアンチテーゼを提出しているということである。その最たるものは、『ドンビー』をさかいいにして、ディケンズが描く世界が大きく変化したという認識である。もっとも、このこと自体は、それまでも漠然としたかたちでは多くの人々に感じられていただろう。例えば、1840年に書かれた George Orwell の論文でも、このようなディケンズの作品における断層は意識されているが、もっぱらディケンズの内的発展のようにとらえられているように見える。これに対して、ハウスは社会史的観点を持ち込んだ。そして、初期のディケンズには個人しか見ることができなかったが、後期のディケンズになると、社会を動かすもっと大きな、抽象的な力を認識することができるようになり、それを小説のテーマとして描こうとした。しかも、その背景には、社会自体の変化があったのだという。すなわち、徒弟制度やものの生産が中心である社会から、金融中心の、多かれ少なかれ金が抽象化された社会への変化が存在したというわけである。このように、ヴィクトリア朝社会そのものが変質し、それに応じてディケンズの認識が変わったというような視点は、ハウス以前には存在しなかったのではないだろうか？

では、さらに、上に集めた *The Dickens World* の断片から、どのようなディケンズ像が現われてくるのだろうか？ 問答形式で考えてみることにする。

(1) ディケンズは歴史を正確に描いているだろうか？

「ノー」。例えば、ディケンズが描く世界は、20、30年代の記憶を中心にしながら、その後の時代の特徴をも加えており、そのまま歴史と考えることはとうていできない。

(2) ディケンズは階級を否定しているだろうか？

「ノー」。一見労働者階級の代弁者のように見えるが、階級は絶対的なものと考えているし、ディケンズ自身の意識は中産階級そのものだ。



(3) ディケンズは、小説や雑誌を利用して、社会についてさまざまな発言や提言を行っているが、政治的人間だろうか？

「ノー」。何かヴィジョンを持っていたわけではなく、きわめて実際的な人間で、社会のさまざまな方面の「効率」をよくしようとしたにすぎない。

(4) ディケンズは馬車が走っていた古きよきイギリスをこよなく愛する人だったか？

「ノー」。鉄道をはじめとして、社会に生じた新しい変化にも魅せられていた。

(5) ディケンズは社会問題を先取りしたか？

「ノー」。ディケンズが取り上げたのは、たいてい、すでに問題として人々の意識にのぼっているものばかりだった。

(6) ディケンズのおかげで、何か社会の制度が変わったか？

「ノー」。何も変わらなかった。

このように、一般の人々がディケンズについて抱いていた(あるいは、今でも抱いている)イメージを、ハウスはことごとく否定しているように見える。こうして浮かびあがってくる人物は、進歩を信じ、中産階級的価値観を疑うことなく、お金を愛し、人間の善意を信じ、善意の物語にほろりとする反面、偏った宗教を嫌い、「効率」がこよなく好きで、とてもきちょうめんな性格の、ごくふつうのおじさん、あるいは典型的なヴィクトリア朝人ということになるのではないだろうか？そして、このような凡人としてのディケンズ像、これこそハウスが世につきつけた、最大のアンチテーゼではなかるうか？

## 6

余談だが、ハウスは天才だと思う。たとえば、次の一くさりを読んでほしい。

But when he uses Christian imagery in describing things about which he did feel deeply it is difficult not to feel that it is a mask to conceal some inability to control or express his emotion. There was no question of deliberate hypocrisy; he accepted certain religious opinions, and thought that they were the proper adjuncts of any emotional crisis; but the emotions were more powerful than the beliefs, and the two could never coalesce.

(p.132)

私はこれを読みながら、ハウスリーが「ネルの死」を読んで笑い出さずにいられないなどと、軽薄で、はしたないことを言ったことを思い出した。ハウスがこ

ここで述べようとしているのは、だいたい次のようなことだろう。　　ディケンズは感動したとき宗教的なイメージを用いる。本人の心の中では、宗教的な感動だと思っているが、ディケンズ自身が理屈のかたちで表現できる宗教という器には盛りきることができない、深い感情がそこにはある……。この含蓄の深い文章の強烈な印象を心に持ちながら、ふと、この本を書いたとき、ハウスはまだ30歳くらいだったことを思い出して、私は愕然とした。弱冠30にして、ハウスはなんと精神的に成熟していたのだらうと。ハウスの本の中にはこれだけでなく、精神の成熟を思わせる文章が時々出てくる。ハウスはこの本の中で、“but Dickens’s 18 was most men’s 25” (p.154)と述べているが、これは自分のことを言ったのではなかろうか？